「日々の理科」（第 1081 号） 2017（H29）,-6,22

「サナギから羽化へ（10）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

クロアゲハの羽化と飛翔は、ナミアゲハのそれよりも更に迫力と風格があり、子どもたちの感動を呼ぶ。

子どもたちが自主的に書いた観察カードも、短時間にもかかわらず、力作が多かった。「先生から」の欄に「すばらしい」としか書いていないのは、反省した。もっとクロアゲハに対する思いや、観察の緻密さに寄り添ったコメントを心がけたい。

今回羽化したクロアゲハは、小さな幼虫の時から、子どもたちが大切に育て、何度も観察を繰り返してきた１匹である。最後はミカンの葉から逃げ出し、黒板の下を一晩かけて這いまわり、チョークの粉だらけになった、あの幼虫だった。

子どもたちもそのことを覚えていた。思い出がたくさんあるクロアゲハなのだ。そのチョウが羽化して、いよいよ飛翔の時を迎えた。私は指先に載せて、自ら飛び立つのを待った。しかしこの日は風が強く、雨も降っていたので、なかなか飛び立たなかった。

私は幼虫を持ってきてくれた女の子の手にチョウを移して、飛び立たせようと思った。最初は真っ黒なチョウを怖がっていたが、やがて自分から「じゃあ、手にのっけてみる」と言ってくれた。

クロアゲハは、しばらく女の子の指先にとまっていたが、風がおさまった一瞬、思い立ったように飛び立っていった。チョウは校庭を一気に横切って、反対側のイチョウの樹のほうに飛んでいった。子どもたちは、チョウが見えなくなるまで、ずっと手を振っていた。